

松源崇岳の人と思想

石 井 修 道

松源崇岳は建長寺開山の蘭溪道隆の師翁に当たり、特に筆者が関心をもったのは、鏡島元隆博士の『天童如浄禅師の研究』（春秋社、一九八三年八月）においてである。その中に、蘭溪道隆の示寂前の遺誡五条の第一条が注目されている。

松源一派に僧堂規有り。専ら坐禅を要す。其の余は何をか言わん。千古廃すべからず。之れを廢すれば、則ち禅林何ぞ在らん。宜しく守りて行ずべし。（『大覚拾遺録』参照）

また同時に「建長寺法語規則」にも注目し、宵には「昏鐘鳴つて二更三点まで」、曉には「四更から曉鐘まで」坐禅すべきことを規定しているというのである。そのことはひとり曹洞宗だけではなく臨済宗においても坐禅が強調されていることと、天童如浄と交渉のあった松源崇岳において、如浄の坐禅は松源崇岳からの影響があることを指摘されたのである。その後の主な先行研究は、長谷川昌弘氏の「松源崇岳の思想」（『印仏研』三三―一、一九八三年十二月）、「松源崇岳の研究」（『東海仏教』二九輯、一九八四年五月）、「松源崇岳と天童如浄」（『印

仏研』三六―二、一九八八年三月）があげられよう。筆者は大慧宗杲の系統と虎丘紹隆の系統との交流とその間の宗風について関心があり、ここに松源崇岳でその問題を検討してみよう」と試みるものである。

まず、分かりやすくする為に「松源崇岳中心の略系譜」を掲げておこう。（次頁参照）

既に拙稿「虎丘紹隆と大慧宗杲」（『仏敎史学研究』二五一、一九八二年十二月）で指摘するように、大慧宗杲と虎丘紹隆を「二甘露門」と称するのは、万曆四五年（一六一七）成立の如惺撰『大明高僧伝』まで下るのであって、李浩撰「応庵曇華和尚塔銘」（語録附）等の当時の文献が示すように、示寂年次を同じくする円悟克勤の法嗣の大慧宗杲と円悟克勤の孫の応庵曇華が「二甘露門」と称されていたのである。決して世代で同時代人の活躍を判断してはならないのである。このことは松源崇岳の伝を検討する場合においても極めて重要なことである。

楊岐方會九一〇四九—白雲守端一〇三二五—五祖法演一〇六一〇—円悟克勤一〇六二二—大慧宗杲一〇八九二—仏照徳光一二三二〇

懶庵鼎需九二一五三—木庵安永一七一七—晦翁悟明

虎丘紹隆一〇七七二—応庵曇華一二六三—密庵咸傑一二八六

松源崇岳一二三二〇—無明慧性一二六〇—蘭溪道隆一二三二七

開福道寧一〇五二二—月庵善果一〇七九二—大洪祖証一二四三—月林師観一二二七—無門慧開一二八二

松源の伝記を問題にするには、その「塔銘」が基本になる

きである。

ことは言うまでもない。続藏經に所収される元禄三年（二六九〇）の刊本の系統及び寛政十三年（一八〇二）の刊本の『松源崇嶽禪師語録』の末尾にも「塔銘」が付されており、従来、これに基づいて研究されてきた。しかし、『語録』に付された「塔銘」の文は、東洋文庫所蔵の二種の五山版を含めて、明らかに誤った加筆があり、四部叢刊に収められる撰者陸游の『渭南文集』巻四〇によるべきであろう。没年に関しても、既に陳垣撰『釈氏疑年録』（中華書局、一九六四年三月）で指摘するように、『語録』の「塔銘」の「嘉定二年」の説は、『渭南文集』の「嘉泰二年」の説に明らかに訂正すべ

まず、伝記を述べるに当たり、「塔銘」を仮に一〇段に分け、先いいうように、『渭南文集』を底本にして、二種の五山版との校定文を作成し、先に訓読文を掲げることにする。『語録』の撰者の肩書きは「太中大夫宝謨閣待制致仕陸游撰」と成っている。『略号を底本は（渭）、五山版の語録は（語）、語録と異なる場合のみ江戸期の語録に基づく続藏經本は（続）で使用する」

①松源禪師、名は崇岳。処州龍泉の松源の呉氏に生まる。故に因りて以て自号す。幼時より已に卓犖たつらつとして群ならず。群児の中に処して、未だ嘗て嬉きど宕たうせず。稍やや長じて出世の法を聞きて、之れ

松源崇岳の人と思想（石井）

を慕嚮す。年二十三にして家を棄てて、掃塔の服を衣る。五戒を天明寺に受く。

松源禪師、名崇岳^{*}。生於処州龍泉之松源呉氏。故因以自号。自幼時、已卓犖不群^{*}。処群兒中、未嘗嬉蕩^{*}。稍長聞出世法、慕嚮^{*}之。年二十三、棄家、衣掃塔服。受五戒於天明寺。

岳^{}岳（語）^{*}嶽（統）、以下同。*已^{*}以（語）。*群^{*}凡（語）。*宕^{*}蕩（語）。*嚮^{*}向（語）。年^{*}ナシ（語）。*天

大（語）。

②首^{はじ}め靈石妙禪師に造り、繼いで大慧杲禪師に径山に見ゆ。久しくして大慧陸堂し、蔣山の応庵華公の為人径捷なりと称す。

首造靈石妙禪師、繼見大慧杲禪師於径山。久之大慧陸堂、称蔣山応庵華公為人径捷。

応庵^{}ナシ（語）。*庵^{*}庵（渭）。以下同。

③師之れを聞きて、且を待たずして行く。既に至りて、入室するも未だ契わす。退いて愈いよ自ら奮勵す。中夜、自ら狗子無仏性の話を挙して、豁然として得ること有り。即ち以て応庵に扣くに、挙するに、庵、世尊に密語有り、迦葉覆蔵せずという。師、和尚を鈍置すと云うに、応庵声を厲まして一喝す。是れより朝夕咨請す。応庵大いに喜んで、以て法器と為す。偈を説いて勧めて祝髪せしめ、吾が道に棟梁たらしむ。

師聞之、不待旦而行。既至、入室未契、退愈自奮勵。中夜、自拳狗子無仏性話、豁然有得。即以扣心庵、拳庵世尊有密語、迦葉不覆蔵。師云、鈍置和尚、応庵厲声一喝。自是朝夕咨請。応庵大喜、以為法器。説偈勸使祝髪、棟梁吾道。

中^{}終（語）。*自^{*}ナシ（語）。*拳庵^{*}応庵拳（語）。

④隆興二年（一一六四）、師始めて臨安の西湖白蓮精舎に得度す。是れより江浙の諸大老の門を徧歴す。其の意に當ること罕なり。隆興二年、師始得度於臨安西湖白蓮精舎。自是徧歴江浙諸大老之門。罕當其意。

始^{}ナシ（語）。*浙^{*}浙（語）。

⑤乃ち海に浮んで閩に入り、乾元の木庵永禪師に見ゆ。一日、木庵を弊して、黄檗に往かんと欲す。木庵、有句無句は藤の樹に倚るが如しというを挙ぐ。師云く、裂破。木庵云く、瑯琊の好し一堆の爛柴と道う。師云く、矢上に尖を加う。是の如く応酬すること数反す。木庵云く、老兄の下語、老僧は此の如くに過ぎざるも、祇是し未在なり。他日払柄手に在るも為人し得ず、人を驗し得ず。師云く、為人の者は、博地の凡夫をして一超に聖域に入らしむ。固より難し。人を驗する者は、面前に過ぐるを打向ちて、口を開くを待たずして、已に渠が骨髓を知る。何の難きことか之れ有らん。木庵手を挙げて云く、明明に汝に道わん、口を開くことは舌頭上に在らずと。後に当に自ら知るべし。

乃浮海入閩、見乾元木庵永禪師。一日弊木庵、欲往黄檗。木庵拳有句無句、如藤倚樹。師云、裂破。木庵云、瑯琊道、好一堆爛柴。師云、矢上加尖。如是応酬数反。木庵云、老兄下語、老僧不過如此。祇是未在。他日払柄在手、為人不得、驗人不得。師云、為人者、使博地凡夫、一超入聖域、固難矣。驗人者、打向面前過、不待開口、已知渠骨髓、何難之有。木庵拳手云、明明向汝道、開口不在舌頭上。後、當自知。

*弊^レ辭^{（語）}。*欲往黃檗^ニナシ^{（語）}。*老^ニ吾^{（語）}。

*不過如此祇是未在^ニ不能過其如未在^{（語）}。*後^ニ復^{（語）}。

⑥年を逾えて、密庵に衢の西山に見え、問いに随いて即ち答う。

密庵微笑して曰く、黄楊禪なるのみ。師、道を明めるに切にして、

寢食を忘るるに至る。密庵、蒋山、華藏、径山に移住す。皆な之

れに従う。一日、密庵入室の次、傍僧に問う、不是心、不是仏、

不是物、と。師側に侍して豁然として大悟す。乃ち云く、今日方

めて本庵の道う、口を開くことは舌頭上に在らずということのを

会す。是れより機弁縦横にして、鋒触るるべからず。密庵又た靈隠

に遷る。遂て師に命じて堂中の第一座と爲す。

逾年、見密庵於衢之西山、随問即答。密庵微笑曰、黄楊禪爾。師

切於明道、至忘寢食。密庵移住蒋山、華藏、径山、皆從之。一日、

密庵入室次、問傍僧、不是心、不是仏、不是物。師侍側、豁然大悟。

乃云、今日方会本庵道、開口不在舌頭上。自是機弁縦横、鋒不可触。

密庵又遷靈隠、遂命師爲堂中第一座。

*笑^ニ咲^{（語）} ^ニ笑^{（統）}。*住^ニナシ^{（語）}。*一日^ニ会^{（語）}。

*不是心^ニ不是心^{（語）} ^ニナシ^{（統）}。*密^ニ木^ニ誤^ル（消）。

*堂中^ニナシ^{（語）}。

⑦旋りて平江の澄照に出世し、密庵の嗣と爲る。江陰の光孝、無

爲の治父、饒の薦福、明の香山、平江の虎丘に遷る。皆な天下の

名山なり。惟だ治父のみ最も寂寞たり。又た火を以て廃る。師一

たび之れに臨むに、四方の名衲踵いで至り、棟宇も亦た大いに興

こる。人、師能く所居の山を大ならしむと謂えり。

旋出世於平江澄照、爲密庵嗣。遷江陰之光孝、無爲之治父、饒之

薦福、明之香山、平江之虎丘。皆天下名山。惟治父最寂寞、又以火廢。師一臨之、四方名衲踵至、棟宇亦大興。人謂師能使所居山大。

*遷^ニ徙^{（語）}。*名^ニナシ^{（語）}。

⑧慶元丁巳年（一一九七）、適たま靈隠虚席す。僉人曰う、安ん

ぞ岳公の来るを得んや。果たして旨を被りて以て師に昇う。驢声

潮の如し。居すること六年、道盛んに行わる。得法の者衆し。法

席一時の冠と爲る。而して師に棲隠の志有り。即ち章を上りて住

持の事を罷めるを乞う。上、其の誠を察して、之れを許す。退い

て東庵に居す。俄かに微疾に属す。猶お少しも倡道を廢せざるが

ごとし。忽ち一則の語を垂れ、以て學者を驗さんとして曰く、有

力量の人、甚麼の爲にか脚を抬げ起こさざる。口を開くことは舌

頭上に在らず。又た書を嗣法せる香山光睦、雲居善開に貽し、伝

えるに大法を以てす。因に偈を書して曰く、来に所来無く、去

に所去無し。玄関を警転し、仏祖措くこと罔し。跏趺して寂す。

実に嘉泰二年（一二〇二）八月四日なり。得年七十有一、坐夏

四十。全身を奉じて北高峰の原に塔す。

慶元丁巳年、適靈隠虚席。僉曰、安得岳公来乎。果被旨以昇師。

驢声如潮。居六年、道盛行。得法者衆。法席爲一時冠。而師有棲

隠之志。即上章乞罷住持事。上察其誠許之。退居東庵。俄属微疾、

猶不少廢倡道。忽垂一則語、以驗學者曰、有力量人、爲甚麼抬脚

不起。開口不在舌頭上。又貽書嗣法香山光睦、雲居善開、伝以大法。

因書偈曰、来無所来、去無所去。警転玄関、仏祖罔措。跏趺而寂。

實嘉泰二年八月四日也。得年七十有一、坐夏四十。奉全身塔於北

高峰之原。

松源崇岳の人と思想（石井）

* 丁巳^二三^一（語）。* 適靈隱^二靈隱適^一（語）。* 法^二師^一二誤ル^一（統）。

* 棲隱^二栖遯^一（語）。* 倡^二唱^一（語）。* 忽^二忽親作書別諸公卿且^一（語）。* 一^二二^一（語）。* 為^二因^一（語）。* 伝^二囑^一（語）。* 泰^二定^一（語）。

⑨塔成りて四年、香山、其の侍者道孚をして、銘を以て某に属せ遣む。某方に事を謝して、鏡湖の上りに居す。年、八十に過ぎて、一榻に病臥す。書を得て覺えず起立して曰く、亡友臨川の李德遠浩、実に道を密庵に聞く。蓋し密庵と同参なり。李德遠毎に某と参問悟入の時の機縁の言句を談ず。率ね常に且に達す。今ま師の語を読むに、峻峭嶮峻にして、下に雲雨に臨むこと千仞の華山に立つが如し。天を蹴り空に駕し、心を駭かし目を眩ますこと錢塘海門の濤の如し。虎豹股栗し、屋瓦震動すること漢軍昆陽の戦の如し。追いて德遠の言う所を思いて、然して後に師の臨濟正宗にして密庵、密庵の真の子孫なることを具えるを知る。

塔成之四年、香山遣其侍者道孚、以銘属某。某方謝事、居鏡湖上年過八十、病臥一榻。得書不覺起立曰、亡友臨川李德遠浩、実問道於密庵。蓋与密庵同参。李德遠毎与某談参問悟入時機縁言句率常達旦。今読師語、峻峭嶮峻、下臨雲雨、如立千仞之華山。蹴天駕空、駭心眩目、如錢塘海門之濤。虎豹股栗、屋瓦震動、如漢軍昆陽之戰。追思德遠所言、然後知師具臨濟正宗密庵之真子孫也。

* 孚^二敷^一（語）。* 銘属某^二師八会語録来求銘於游^一（語）。* 某^二游^一（語）。以下同。* 李^二ナシ^一（語）。* 立^二五^一（語）。* 動

墮（語）。* 具^二為^一（語）。

⑩銘に曰く、臨濟の一宗、先仏の正伝。密庵父子、一口を以て吞む。金圈・栗蓬、晩に松源に授く。松源初心、論劫参禅す。一笑の中に於て、疾雷山を破る。八道場に坐し、衆、瀟瀾の如し。金鐵手を脱して、首を碎き肝を裂く。彼の昏き何ぞ智ならん、万里の鉄関。後十大劫、山を推き川を湮めん。法力の持する所、此の塔巋然たらん。

銘曰、臨濟一宗、先仏正伝。密庵父子、以一口吞。金圈栗蓬、晩授松源。松源初心、論劫参禅。於一笑中、疾雷破山。坐八道場、衆如瀟瀾。金鐵脱手、碎首裂肝。彼昏何智、万里鉄関。後十大劫、摧山湮川。法力所持、此塔巋然。

* 晩^二脱^一（語）。* 笑^二咲^一（語）。* 坐^二八^一八坐^一（語）。* 首^二骨^一（語）。* 智^二知^一（語）。

この伝記の中で注目すべき最も重要なことは、松源は密庵咸傑の下で大悟しその法を嗣ぐが、その大悟の内容の確認が木庵安永の「開口不在舌頭上」の説であつたということである。木庵安永は大慧宗杲の孫であることは言うまでもない。松源が大慧宗杲に参じた時に、密庵疊華を「蒋山の密庵華公の為人径捷なり」と推奨していることはその宗風に対立などは考えられないのである。しかも、「開口不在舌頭上」の説とは外でもない松源崇岳の二転語乃至三転語と喚ばれるようになって、法嗣の無明慧性に引き継がれ、二転語は『無門関』の二〇則「大力量人」の話として知られるようになるのである。『語録』によれば、黄龍慶如の「語録序」にも「松源和

尚司徒云、明明向汝道、開口不在舌頭上」とあるように、松源は中でも「開口不在舌頭上」の説だけをしばしばくりかえして説いていたことが判明する。

それでは松源の中心的な説である「開口不在舌頭上」とは、いかなる内容なのであろうか。ここに興味ある二つの「普説」があるが、その全文を紹介することは紙数の関係でできない。その一部は次のようになってゐる。趙州が始まる「普説」「イ」を仮に七段に分けると、長慶慧稜の捲簾大悟の因縁や有名な香巖擊竹悟道の話や大慧の法嗣の晦庵弥光の大悟を述べた後に次のように述べるのである。

⑥若し此の事を荷担せんと要せば、実に人を得ること難し。所以に大慧、円悟の、如何なるか是れ諸仏出身の処、云く、薰風南より来たりて、殿閣微涼生ず、と云うに因りて、漆桶を打破し了る。入室に至る毎に、円悟只だ是れ道う、未在、と。後に、樹倒れ藤枯る時如何、云く、相い随ひ来たる、というを挙するに因りて、驀忽に非を知る。円悟便ち請して立僧せしむ。

⑦參禅は須らく是れ悟るべし、悟り了りて須らく是れ人に遇うべし。若し人に遇わざれば、莫教い箇の扠子の柄の汝が手裏に在るも、為人して為し得ず、人を驗して驗し得ず、只だ是れ杜撰の阿師にして、学人の眼を瞎するのみ、是れ小事ならず。你看よ、五祖の説話、只だ尋常の語言を用うるのみ。須らく知るべし佗の為人の処別なることを。後に三仏の出で来たるを得て、甚だ氣概を生ず。是れ佗は真箇の正脈を踏著する底。決定して事に干わらず。

松源崇岳の人と思想（石 井）

也た如何んが佗の這の星子を味得せん。你若し踏み著れざれば、自ら軀身の一路無し、只だ一知半解を守るのみにして、鄭重に宝惜し、肯て放捨せざるは、乃ち是れ大病なり。畢竟種艸と爲るに堪えず。明明に汝に向かつて道う、口を開くことは舌頭上に在らず、潮を弄するは、須らく是れ潮を弄する人なるべし。急に精彩を著けよ。大丈夫兒、阿誰か分無からん。夜深けて久立。

ここは『大慧語録』卷一七（大正卷四七—八八 a b）等で知られる大慧の大悟の過程と松源自身の経験が見事に重なり合はれており、「開口不在舌頭上」とは、言語を通して大悟を経験しても更に遇人が必要であるという。その遇人によつて為人や驗人が出来るまでに到るというのであるから、公案の言語の商量を突き抜ける真の大悟の必要性を示唆しているといえよう。今一つの心外無法が始まる「普説」「ロ」を仮に四段に分けると、その二段目には長文の応庵曇華の大悟の経験が松源の経験とこれまた重ね合はれて語られるのである。

まずは応庵の公案參究について語られる。

師祖初めて行脚の時、一尊宿の会下に在りて住す。多く學者をして公案を過ごさしむ。時に師祖、一僧と同じく仏殿裏に在りて一則の公案を過ごす。恁麼に過すも也た過し得ず、又た恁麼に過すも也た過し得ず。二人商確して、覚えず鶏唱う、遂て掌を拊ちて散じ去る。後來一一に過ごし得るも、只是し依前として肚裏黒漫漫地なり。遂て冷地に思量して道う、若し恁麼に參禅せば、如

何が生死に敵得せん。

次に曹洞宗の大洪報恩（一〇五八—一一二一）の法嗣の水南守遂（一〇七二—一一四七）の下で学んだ公案參禅の指導を批判し、更に円悟克勤に参じ、円悟が蜀に帰る時に随おうとするが、虎丘紹隆・大慧宗杲・此庵景元（一〇九四—一一四九）のいずれもが「見処は老僧と一般なり。但し去きて佗に見えさえずれば、必ず汝が為に大事を了却せん」と言われ、結局、虎丘紹隆に参じて大悟し、嗣法するのである。その後に応庵が此庵に参じた時のことを次のように語るのである。

此庵元和尚、時に処州の連雲に住す。師祖道う、我れ旧に雲居に在りし時、毎に這の漢の無滋味を喫す。如今看來らば、未だ必ずしも佗の我が田地に到らず。且く去りて佗を驗し看ん、如何と。纔かに到るや、便ち方丈に上る。侍者通報す。此庵聞き得て、郎忙として出で來たる、一見して便ち云く、華兄、此の番且喜すらくは大事了畢せることを。師祖道く、我未だ曾て口を開かざるに、佗已に知り了りぬ。得底の人の相見、言に形るに在らずして、便ち落処を知る。這箇は便ち是れ參禅底の榜様なり。豈に今時の一般の長老と学者との相見の一句來たり、一句去り、最後に一句を多くして、便ち禅を贏ち得たると為すに似らんや。究竟して深淺を知らず。蓋し佗は曾て正脈を踏著せず、只だ言句裏に在りて活計を作すのみ。

このように二段を終えて、三段には拄杖子の話、洞山麻三斤の話や南嶽磨瓢の話を取り上げ、最後の四段を次のように

結んでいるのである。

嶽上座却て箇の方便有り。只だ汝が情を尽くして放下して従前の学得底、參得底、悟得底、諸方伝得底を、一時に佗方世界に颺向して、箇の百不知、百不会底の人と作り、舌、私に寄せず、意、玄に停まらず、心に恃む所無く、行に倚る所無らんことを要す。驀然として失脚して踏翻せば、以て箇の没量大漢と作りて、臨済正宗を滅却し、一切人の与にを解き縛を去り、楔を抜き釘を抜くべし、則ち一一に縋索皎然たらん。所以に道う、你若し高髯たる峰頂に立たば、我れ便ち深深たる海底に行く、と。是れ人と共に住すること難きにあらず、大都縋索分明ならんと要す。兄弟、山僧今夜情を尽くして道了れり。須らく知るべし、口を開くことは舌頭上に在らざることを。喝一喝す。

この普説の結びにも「開口不在舌頭上」の語が示されているが、上に紹介した一部分にもその述べようとする内容が示されていると言えよう。すなわち、「我未だ曾て口を開かざるに、佗已に知り了りぬ。得底の人の相見、言に形るに在らずして、便ち落処を知る。這箇は便ち參禅底の榜様なり」という。つまり、言語に出す以前の消息を遇人を通して確認しなければならぬということである。これらから判断すると、全く公案を使用しないのではない。むしろ為人の手段として公案が使用されるのである。しかし、その公案を通過した世界は言語に留まってはならないのである。それは「普説」で

応庵がいう「尽大地は一箇公案」であり、回庵譙令憲の「松源和尚語録序」にいう松源の接化の「本分現成公案」ということである。

松源崇岳の思想を検討するには、また、多くの説示を分析する必要があるが、彼の「塔銘」は重要な分析の材料であることだけは指摘できたと思われる。その資料は『渭南文集』の塔銘を利用する必要があることも『語録』との比較から判明したといえよう。松源の伝記は、更に当時の禅者の交流を詳細に検討する必要がある。松源崇岳は結局は「臨済正宗」「楊岐正脈」「東山正脈」を打ち立てたのであり、その宗派意識を越える主張がなかったことは、『語録』のいたるところに現れていることで間違いない。その宗風が禅思想史上でいかなる特色をもつのかは幅広い検討が今後に残されているよう。

（キーワード） 松源崇岳、『渭南文集』、開口不在舌頭上、木庵安永

（駒澤大学教授、文学博士）

Taishō Canon vol.14. Therefore, in this paper I have researched the *Vimalakīrtinirdeśa* text dated close to the time of Zhiyi, as far as the eighth chapter. On the basis of this research, I was able to point out areas with particular relevance to Zhiyi.

25. Songyuan Chongyue: His Biography and Thought

Shūdō ISHII

In this article I have re-examined the stūpa inscription for Songyuan Chongyue (松源崇岳), which was written by Lu You (陸游) and included in his *Weinan Anthology*. According to the inscription, Songyuan was enlightened upon hearing Mi'an Xianjie's (密庵咸傑) instructions on Muan Anyong's (木庵安永) phrase, "opening one's mouth is not on the tongue." Muan Anyong was a second-generation successor to Dahui (大慧). Afterward, this phrase came to represent Songyuan's teaching. The phrase's meaning is examined on the basis of two of his general lectures (普說), in which both the experience of great enlightenment based on the kōan and having an encounter with a good Zen master are important. Thus this kōan becomes referred to as "a single kōan that exhausts the great earth" and "the kōan of the immediate manifestation of one's original allotment."

26. Shenhui's (神會) Bodhisattva-śīla Thought

Shirō NAKAJIMA

Parallelisms between the early stage of Chan Buddhism (禪宗) and the Mahāyāna-Bodhisattva-śīla Movement (大乘菩薩戒運動) have been pointed out. Northern Song Chan's (北宗) *Wushen Fangbian men* (『無生方便門』), Shenhui's *Platform-Words* (『壇語』), the *Lidai fabao ji* and the *Dunhuang Platform Sūtra of the Sixth Patriarch* (敦煌本『六祖壇經』) "Mind-ground-Formless-śīla (心地無相戒)" record the giving and receiving of the Mahāyāna-Bodhisattva-Cīla according to the rites prescribed in the *Fanwang jing* (『梵網經』) since the Fourth Patriarch Daoxin (四祖道信). That Shenhui's *Plat-*